
言葉にまぎれたうやむや世界。

ランタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉にまぎれたうやむや世界。

【Zコード】

Z9213A

【作者名】 ランタン

【あらすじ】

一人の少女が学校で『消えた』
あまりにも哀しいものだった。
……その奥に隠された真実は、

プロローグ 夜の学校の静寂（前書き）

ためすぎだらー…といつ文句があつたらすこません。
今度こそは続けよつかと……思います。
まだまだ至らない点も多々あると思いますが、よろしくお願いします。

プロローグ 夜の学校の静寂

「……やつと、見つけた……」

夜の学校。

暗闇に満ちた場所に、少女が立っていた。
少女の手は血まみれだったが、全く痛そうなかんじはない。
その表情はとても暗く、また同時に明るい印象も与える。

「……やつと……」

顔はげつそりと苦労の表情があつたけれど、その中には歓喜の表情もあつた。

そして、静かに少女は歩き出す。

夜の学校の闇に向かって……

第一話 生徒会室の静寂

静寂に包まれた生徒会室には、一人の女が座っていた。
制服にはとこりどこりにほつれがあつたり、スカートも短くて、
いかにも問題児という風貌だ。

段カットの髪の毛は恥じることなく堂々としていて、彼女が普段
どんな人物であるかを思わせる。

「遠藤、いるんだつたらさつさと出できなさいよ」

彼女の気迫におそれてか、ドアの影から男が出てきた。

「……すっかり生徒会室を乗つ取りやがつて。副会長は俺だつて言
うの」

私立清和学園生徒会副会長・遠藤達也はふてくされながら言つた。

「何いつてんの。さつさと報告してよね

偉そうに文句をいう女子高生・進藤由香は眉をひそめた。

達也は静かに、透き通つた声で手に持つた紙を読み上げる。

「海藤成実は中学三年生。彼女は友人に評判の『占い師』だつたら
しい」

「占い師？」

由香が怪訝そうに聞いた。

「……今日の運勢とか。まあ、テレビの占いとそう変わらない」

「それで？」

達也は少し信じられないよう言つた。

「一度も外れる事は無かつたらしく……」

由香が頷く。

「わかった。急いで私は彼女の行方を追うわ。……たく、なんで他の人の運勢占えて自分の運勢わからないんだろうねえ」
ブツブツ皮肉をいいながら、由香は生徒会室を出る。
すかさず達也は聞いた。

「代金は？」

「急いでるから、後」

達也はもう誰もいない生徒会室でため息をつく。

「そんなこと言つて、もう一〇回分滞納してゐるやせに……」

第一話 携帯電話の静寂

この学校には、『守護者』がいる。

生徒の行動を監視し、同時に生徒を護り、生徒の害になるものを排除する組織だ。

しかし、そんな集団が白毎堂々学校にいるわけにもいかないので、その代表として進藤由香が達也に情報を求める毎日生徒会室に来ている。

達也としては、そんな集団に関わりたくは無かつたし、興味も無かつた。

だけど、由香にはもう『契約』を交わしてしまっているので、情報を公開する義務がある。

仕方ないが、そうするほかないのだ。

だが、達也だって生徒の情報を無料で教えるわけにはいかない。なんと言つたつて生徒会副会長の責任がある。

そういうわけで、毎回由香から代金を頂戴しているわけだ。そして由香にもう10回分滞納されるといつ最悪の結末。

ああ、乙葉がもう少しとともに仕事をしてくれればいいのに。

乙葉は私立清和学園の生徒会長だ。

しかし、当選しても全く仕事をせず、注意しようと思つてもいつも教室にはいない。

周りの人間はそろつてどこに行つたか聞いても、「知らない」「あまり授業にこない」と口をそろえた。

乙葉の彼女の垣藤夏美も、全く知らないそうだ。

乙葉は全く仕事をしないし、そのうえ由香の件もあるし……もつもつそろそろ達也は倒れそつた。

ピラミッド

達也は由香を追つて学園を抜け出してきたので、一応乙葉にも電話をしようとした携帯電話で乙葉に連絡を取る。

「もしもし？」乙葉？」

すると、一拍遅れて声がした。

「あ……違ちがう」とした?

「無いから……」

言し終わる前に、乙葉は大声で言ふ。

「やめろ！ 海藤成実の件は危険だ。今すぐ手を引いた方がいい」
乙葉が大声で怒鳴るのは初めてのことだったのに、達也は驚く。
いや、もっと驚いたのは海藤成実のことを見た乙葉が知っていたこと
だ。

「葉」の「」を語った覚えはない。

「乙葉……？」

気が付くと、電話は切れていた。

第三話 街頭の静寂

「……」

達也が黙つて携帯電話の画面を見ていると、由香がイライラした
ように覗き込んだ。

「ちょっと、海藤成実について少し分かったから……ん？」

「あつちよつと……これはその……」

あたふたと言い訳を考えている達也をじろじろ疑わしげに見ながら、由香は言い放つ。

「今更他の人に連絡して私をどうにかしようなんて考えない方がいいわよ」

どうやら、2人の思考は完全にずれていたらしい。

「違つて。あ、それより乙葉にこのこと教えた？」

すると、由香は軽蔑するように達也を覗んだ。

「何言つてんの？ 今さつき私は情報聞いたばかりなんだけど」

そういえばそうだった。

「じゃあ……なんで乙葉が知つてるんだ？」

「知らないわよ。それより、海藤成実のことと分かった事があるのよ」

由香は急いで携帯電話を取り出した。

どうやら、達也が乙葉と喋っていた間、由香も誰かと喋っていた
うらうら。

「……あ、もしもし？ わきの件についてなんだけど。うん。それそれ。……あーうん」

電話の相手と喋りながら、由香はカラカラとシャーペンでメモに走り書きをする。

「……んじやばいばい。ありがと」

「何？ 何がわかつたんだ？」

達也が少し怒ったように言つと、由香は言つた。

「海藤成実のこと。」の「いろは、よく街をふらついたらしいわ。それだけじゃなくて、少し妙な事も分かつてきてるの」

由香は、眉根を寄せて考え込んだ。

「妙な事？」

「海藤成実は、何かを企んでたらしいの」

第四話 再び・生徒会室の静寂

「企んでた?」

達也が訳がわからないというように咳いた。

「……様子が変だつたらしいの。心配して声をかけてみたら、変な事をぼやいてたみたい」

「変な事?」

由香は訝しげに言った。

「『あの計画は私にしかできない』」

達也は、それを聞いた瞬間、冷や汗をかいた。

きつと行方不明になつたその日、海藤成実はなにかを実行しようとした……

そうなると、失敗した可能性が高い。

しかし、今のところ変死体とかの遺体は見つかっていないし、そういう情報もない。

「とにかく、もうちょっと情報を洗い出さないと海藤成実を追えないとわ」

由香は田を細めて、覚悟を決めたように呟つ。

「遠藤はちょっと学園に戻つて情報を探して。いい? 誰に邪魔されようと絶対何か見つけて」

「……わかつた。んで、進藤はどうするんだ?」

すると、由香はさらりと言つた。

「もうちょっと情報を探つてみる。絶対にこれは何かあるわ」

そして、由香と達也は急いで自分の仕事にとりかかつた。

「……やつぱり、この方法しかないな……」

誰もいなはずの生徒会室には、生徒会長・真藤乙葉が本をパラパラめくっていた。

そして、乙葉は何の感情もない顔に、少し不安を感じませている。

「お互い、命をかけた戦いだからな、達也には悪いがしおりがない……」

乙葉はそう呟いてから、何事もなかつたかのようにまた単調な作業を繰り返す。

それは誰も知らない、乙葉の『覚悟』だった。

第五話 図書室の静寂

「とりあえず学校に戻った達也は、図書室に向かった。まずは洗いざらいなんでもいいから海藤成実のことを調べないと言われたからだ。」

「海藤成実の貸し出し履歴は……と」

司書さんにも許可をもらつて、パソコンで調べてみると、なんと不可思議な書物が出てくる。

『『清和学園の歴史』『清和学園歴代校長』『私立学園の十七不思議』『清和学園のミステリー』……』

そんな本がこの図書室にあつたことだけでも十分驚愕の事実なのに、それを借りていた女生徒が行方不明というのも無視できない事実だ。

「……」

「とりあえず、由香に連絡したほうがいいかもしない。」

そう思つた達也は、とりあえず携帯電話を手にとつて、由香に電話をかける。

「あ、もしもし?」

「進藤か? 今ちょっと学校の図書室にいんだけど、それが……」
そして、達也は全てを由香に話す。ただ、真実をそのまま由香も、何も言わずにただ黙つて聞いていた。

「……うん。まあそんなところだなと思つたわ」

思いがけない由香の言葉に、達也は驚く。

「何か、わかったのか?」

「うん。こっちでもね、大体調べがついてきたの。というか、今海藤成実の家にいるわ」

さりと当然のことのよつて由香は、達也は内心あせつた。

「え、それって不法侵入じゃ……」

「大丈夫よ。こっちだつて馬鹿じやない。だてに守護者やつてるわけじゃないんだから」

「達也」がそんなことを言つとは心外だ、と言つよつて由香は自信たつぱりに言つ。

「ふん、それで、なんか見つかったのか？」

「ええ。今あんたが言つた本みたいなのがこっちに大量にあるわ」

由香は、少し声をひそめた。

「海藤成実の部屋の本棚に、びつしり本が並んでる」

第六話 海藤成実家の静寂

「本?」

達也が聞き返すと、由香はさうに声をひそめる。

「うん、それが統一された本じゃないの。今あなたが言ったように歴代の校長の写真とか、学校の歴史とか、迷信の本とか……せっぱりわからないわ」

「……わかった。じゃあちよつとその本持つてきてくれ。今すぐそつちに行くから」

由香は達也に海藤成実の家への道を説明して、電話を切った。達也の頭の中は、ただ海藤成実で埋まっていた。

副会長として、と言うのとは少し違つ。そういうのじゃなくて、ただ、なぜ海藤成実が行方不明になる必要があったのか、今彼女が何をしているのかが気になつたのだ。

要するに、個人的にそれを知りたいだけ。

「ほら、これにこれとか、これも
海藤成実の家に来ると、いきなり由香が何冊かの本をざたつと出していく。

「……こんな大量に、本が?」

それ自体不気味だな、と思いながらも達也はパラパラと本をめくる。

すると、不思議なことが書いてあつた。

『汝、汝は生きるものであり、同時に死するものである』

その本には、他のページは普通の雑誌と変わりないのに、そこだけ何百年何千年と年代を過ぎててきたかのように黄ばんでぐしゃぐ

しゃになっていた。

「なあ進藤、これ……」

その時。

ピコピコ……

携帯の着信音がなって、達也はすぐ出て出る。

「もしもし?」

そうすると、乙葉の声が途切れ途切れに聞こえた。

「達……也。急いで……学校に来い……」

「乙葉か? どうしたんだよ

ブツツ

達也の顔色を見て、由香がすぐ止ま聞く。

「会長が、どうしたって?」

正直、達也にもわからなかつた。

第七話 再び・夜の学校の静寂

携帯電話を閉じてから、しばらく達也も由香も何も言えなかつた。

「とりあえず、急ぐわよ」

由香はあわただしく準備をして、達也を急かす。

「あ、ああ……」

でも、達也はあまりぴんとこなかつた。

あの声の途切れ方は、電波の途切れたかんじとは少し違つよつな気がしたからだ。

なんていうか、上手く説明できないけれど、まるで……

「つー?」

その答えにたどり着いた途端、達也はぎくつとする。

「進藤、ちょっと俺先に行つとく! 説明は後でするからー」

「ちよつと……」

由香が止めるのも無視して、達也は走り出す。

何も考える余裕がなかつた。もはや一刻の猶予も許されない。

雨の中、達也は学校に着いた。

白髪の黒髪も、イニシャルが書いてあるTシャツも、ずぶぬれになつてしまつたけれど構わない。

校門は閉まつていたけれど、とりあえずよじのま。

「乙葉! 乙葉っ」

夜の学校は、酷く昼間とは別のものに見える。見えた景色に、拒否されてこむよつを感じる。

「達……せ……」

か細い声が、近くである。

「乙葉か！？」

声のする方向に、達也が田を開けると、そこには考へても見なかつた光景が映つた。

乙葉の頭から、田から、足から、とめどなく血があふれて、顔面蒼白だつた。

しかし、乙葉は止まるこゝなく、ただ血がついた指で円陣を描く。そして、乙葉は立ちぬけず達也に、たつた一言、告げた。

「海藤成実を、殺せ」

それが乙葉の最期の言葉だつた。

それもつて乙葉は、一度と田を開けることはなかつた……

第八話 乙葉の静寂

乙葉が死んで、ずるりと崩れ落ちていくのを、達也はただ見ていた。

「遠藤？ どうした……」

声をかけてきた由香も、乙葉のそれをみて、言葉をなくす。一人はただ、動かない乙葉を見るしかなかった。

しかし、由香はすぐに達也に囁く。

「……今大切なのは会長のことじゃなくて、海藤成実のことじゅう？」

それは、乙葉を今は忘れると言つ残酷な意味を含んでいた。

「……」

達也は、無表情に乙葉を見る。さつきまで喋っていたはずのやの口は、閉じたままで動かない。死んだのだ。

昨日まで、今まで、ずっと隣にいたはずの乙葉が、あまりにもあつけなく死んでしまった。

達也はただその現実を、冷たく受けとめる。

由香の言う通り、乙葉のために今までやじまることはそれしかない。

『海藤成実を、殺せ』

「わかった」

決意は固まつた。

もうやるしかないのだ。海藤成実を追つて、殺すしか。

残酷だとは思わない。乙葉が死んだ以上、それ以上の訳などいらない。

学校の校舎には、静寂がたちこめていた。

そして、その中心に海藤成実はいた。

「遠藤先輩。どうかしましたか？」

まるで何も起きていないと言いつつ、口ぶりに、達也は一瞬動搖する。

「……ちがう。ただ、乙葉のことを聞きに来ただけだ」

すると、海藤成実はさらりと言った。

「ああ、生徒会長ね。あの人はなかなか勘が鋭くて苦労したわ。だから、仕方なくそうしたの」

当たり前の事のように言つ海藤成実に、達也はもう何も感じない。

怒りも、哀しみも、何も。

「……勘が鋭い、つていうのは？」

「あの人はもともと私の計画を知つてたみたいね。まあ、阻止されるのは嫌だったから。遠藤先輩にはわかるんじゃないですか？ 会長はいつも教室にいなかつたこと……」

その瞬間、達也はやつと気づいた。

乙葉は、授業をさぼつたわけでも、なんでもない。
海藤成実を追っていたのだ。

第八話 乙葉の静寂（後書き）

いつも「愛読ありがとう」やります。
今後もよろしくお願ひします。感想とかくださつたら泣いて喜びます（笑）

第九話 隠された部屋の寂寥

「……じゃあ、おまえは……」

達也は次の言葉をやつとのことで飲み込んだ。

目の前にいる海藤成実は、動じることは一切なく、ただ目を細めて状況を観察していた。

「先輩には悪いけど、私はもう後戻りはできない。だから……」

海藤成実は静かに、鋸びたナイフを取り出す。

「死んでもらいます」

自分が死ぬ事にどうとも思わない。

でも、まだ駄目だ。ゆずれないものがある。

「……終われるかよつ」

乙葉は死んだ。だけど、自分は生きている。

まだあきらめられないのだ。自分が何かできると思いたかった。

鋸びたナイフが、達也の頬をかすめる。

鮮やかな赤い血がすう、と流れ落ちた。

「わかりました。先輩も、一緒に来て見てください。私の計画を……」

…

正気を失つたようなギラギラした目で、海藤成実は達也を睨む。そのやり取りを見ながら、由香はぼつりと呟く。

「人を殺してまで、達成しなければいけない計画なんてあると思ってるの?」

しかし、誰も反応しなかつた。

達也は、今何より乙葉の死を肯定されるのが怖かつたからだ。

由香の言葉を自然に受け流すほかできない。

コツ、コツ……

学校の校舎の方に向かって、海藤成実は歩いていく。

すると、毎間の学校にはなかつたはずの扉に行き着いた。

「ここは……？」

達也と由香の疑問を見て取つたように、海藤成実はさりとつと言つ。「私が作つたんです。下手に見られないようにいろいろ細工しました。どうぞ」

そう言われて、二人が中に入ると、中にはおぞましい光景が広がつていた。

第十話 再び・隠された部屋の静寂

そこには、中身が抜けたように動かない人体がたくさんあった。

「……これは……」

ぞつとする光景の中で、由香も達也も立ちすくむ。

「ああ、これは人間の抜け殻みたいなものです」

その中には、昼間海藤成実の家で見つけた、校長の本に載っていた歴代校長の肖像画にそっくりな人たちがいた。

「まさか、おまえは……校長を？」

「殺してはいないわ。ただ、体をこっちに持ってきてただけ」校長たちは本当に人形のように動かず、海藤成実も動かない事をわかっているようにただ頷いている。

達也は、目の前に散乱している校長の体を、持ち上げてみた。すると、恐ろしく軽くて、身震いした。

みんな、死んでいるはずなのだ。生きているはずがない。なのに

……まるで生きているような感触がして、鳥肌が立つ。

すると、今まで状況を見ていただけだった由香が、達也にぼそぼそと話した。

「遠藤、海藤成実は今精神状態が普通じゃないから、話をまともに受け入れない方がいいわ。こっちも早いところ誰か呼んどかないと」冷静に言つてはいたが、由香の額には、冷や汗がだらだらと流れている。

「どうやら、状況は相当悪いようだ。『守護者』の田からしたら、このような異常な部屋が学校に存在している事、自体危ない事なのだろ」

「いい？」海藤成実があつちの校長たちに気を取られている間に私が連絡取つてみるから、遠藤はあいつを見張つといつ……あと、最悪の事態も考えといてよ」

由香が達也にそんなことを言つたのは初めてだった。
達也は、由香と田を呂わせないようにして、ゆっくりと頷いた。

第十話 再び・隠された部屋の静寂（後書き）

祝・十話ですね！『コード』以来です。
これからも突っ走っていきたいです！よろしくお願いします。

第十一話 海藤成実との静寂

由香も乙葉も、今初めて達也に会つのだつた。

前々から言つて欲しかつた事を、今言われるのはやはり、辛いものがある。

「……離れるのか？」

いつかは、全てが消えてしまうときが来るのだろうか。その時は、全て洗い流せられるのだろうか。

乙葉の死も、海藤成実の企みも、由香の頼みも、そして、自分の決断さえ。

由香が携帯で『守護者』の他の員を呼ぶ間、達也は海藤成実を見張つていたが、特に新しい動きはしていなかつた。ただ、校長達の動かない人体を興味深げに、そして哀しげに見つめていた。

「あなたは、何をしたいんですか」

まっすぐに海藤成実を見据え、達也は問う。

知りたかった。乙葉を殺してまで、こんな奇怪な部屋を作つてまで、達成しなければならないその『目的』が。

「『何がしたい』ねえ……じゃあ、先輩は、この校長達をどう思います？」

哀しげな瞳が、達也に向けられた。

「もう、校長達のここでの使命は終わつた。もう死んだんだ。乙葉と同じだ。生き返らない……」

そうだ。この校長達はもう死んでいて、乙葉も死んでいる。死んだんだ。生き返らないんだ。泣いたつて喚いたつて怒鳴つたつて、何したつて帰つてはこない。

「私も、そう思います。だけど、この人たち生き返ります」無垢な瞳。決して嘘を言つているようには見えなかつた。

「……うん、そう」

目の前にいる少女は、人を殺してまで、自分をぼろぼろにしてまで、それを信じて、ずっと実行しようとしていたのだ。

達也にとつては、仇でしかない後輩の海藤成実だけれど、それは避けられない事……この計画は、即座に止めなければいけない。それは乙葉から託された役目で、同時に達也の最大の葛藤だった。

第十一話 象徴の静寂

電話を終えたらしい由香が、達也のほうに歩み寄ってきた。

「もうすぐ来るって。その間、時間稼ぎしといて」

そう囁いて、由香は急いで校門に向かって走る。

「先輩……私の計画をどうにかしようなんて考えないで下さいね」

微笑しながら、海藤成実は達也に告げた。

そんなこと、はっきり言つて無理だ。誰もそんなこと望んではいない。目の前にいる少女以外は。

「じゃあ、なんでそんな無謀な計画立てるんだよ」

なんだかイライラして、思わず怒鳴りそうになる。しかし、今ここで怒鳴つても何の意味も価値もない、ただの馬鹿の発言になるので、どうにかして抑えた。

「うーん、それを説明するのはまだ早いみたいですがね。それに、長話だからあまり時間取りたくもないし……」

もつたいたいぶりながら、海藤成実がくすくす笑つて言つた。

それでも、諦めたくはない。何年後になろうと、海藤成実をどうにかして……殺さないと、この学校も、達也も、由香も、そして海藤成実自身もどうなるかわからない。

危険ゆえに、自分の命の危機までさらしているというのに、海藤成実は全くおびえる気配がない。気づいていないのだろうか？

「自分の命が、大切じゃないのか？ いらないのか？」

彼女の手の包帯が全てを物語ついていた。自分の命なんかいらない。削つたつていい。ただ……独りにしないで。

怖いから。傍にいて。誰でもいいから。

死んでもいい。むしろ、死にたかった。今でも死にたいけれど、死ねない。

死ねないものの鎮魂歌

その象徴、
海藤成実。

第十二話 『守護者』の静寂

達也も海藤成実も、何も言わなかつた。

そこにはただ、息苦しいような張り詰めた空気があつて、何も言
う事など出来ない。

彼女は全て知つていて、その上で校長たちを蘇らせ、生き返らせ
ようとしている。そして、自分の父母を取り戻そうと……

「遠藤」

気が付くと、由香が達也をかばうようにして前にいた。

「遠藤？ どうして……」

由香は、海藤成実を見据えて、小さく囁く。周りで、なんとなく
人の気配がした。きっと、『守護者』が到着したのだろう。
「今は何も……言っちゃダメ。海藤成実を……かわいそうだと同情
したりしちゃダメ。とにかく、今は黙つて……」

小さな声は、途切れ途切れにぼんやりと聞こえた。由香の来てい
る制服の裾から、だらんと無防備に傷だらけの腕が出ていた。

「おまえ、腕どうしたんだ？」

海藤成実は微笑しながら、達也と由香を交互に見つめている。目
の前の光景を楽しむかのようだ、由香の表情とは対照的だった。由
香は達也の問いには答えず、ただ、海藤成実をにらみつけている。
3人の間にはただ、沈黙の時が流れていた。誰も何も言わず、そ
れぞれの思いにふけつていた。

その時、風が吹いた。

世界の全てが吹き飛ばされそつた突風。肌に感じる鈍い痛み。

「なつ……」

目を開けることができない。

「遠藤つ

由香が達也を呼んだ。透き通った声。

そして、目を開けた瞬間……誰も、いなかつた。

第十四話 再び・『守護者』の静寂

周りには誰もいなくて、達也は立ちつくす。

「どういつ…… ことだ？」

さつきまで傍にいた由香も、海藤成実も、あの中身の抜けたような校長達も、全て消えていた。元から何もなかつたかのように。その部屋には、かすかに匂いが残っていた。覚えのある匂い……由香の匂いだ。

「進藤？」

人の気配がしたので、達也は思わず周りを見渡す。

「遠藤達也…… と言つたか。我ら『守護者』はここにいる。ただ、進藤だけ連れて行かれた」

老人のよくなじやがれた声が聞こえた。達也は『守護者』の声に耳をませた。

「あ、おまえには我ら『守護者』の姿は見えぬ。あの娘はまだ人間としてうまくやれているがな。…… この期に、話をしておくか」

『守護者』の気配が徐々に近づいてくるのがなんとなくわかつた。何もない部屋には、達也とその『守護者』しかいないようだ。

「昔な、この学校には妖怪が住みついとつたらしい。そこで、お祓いにきた若者が妖怪と『契約』を交わした。一旦それで事態は収まつたかのように見えたが、実はそうではなかつたみたいだ。その若者は事態をさらに重くしていただけだつた」

達也にはその話はちんぷんかんぱんだつたが、『守護者』は構わず話を続ける。

「その若者は、簡単で、かつ自分の身を守るために妖怪にこの土地を売つた。つまりは、人間に見つからぬように潜んでおけと言つたのだ。妖怪はもちろんそれを実行し、しばらく潜んでおつた」

「それで、その妖怪はその後どうしたんですか？」

話がやっと見えてきたので、達也は『守護者』に恐る恐る聞く。すると、なんてことないよう『守護者』は言った。

「この土地……実はな、今もあるのよ。その妖怪の生き残りがな

「今もー?」

「いきなりそんなことを言わわれても、あまり信用できなかつたが、今もいるのなら……」

「進藤は、もしかして妖怪に?」

すると、さも不愉快というより『守護者』は声を低くした。
「先走るな。まだそつとは言つておらぬ。」の話はただ単に『守護者』の発端について述べておるのだ。あの娘とは何の関わりもない。どちらかといふと『死ねないもの』のあの女のほうに関係がある。どちらにせよ、今聞いておくべき話なのだ。さえぎつたりするな。時間の浪費だ

「はい……」

外の様子はわからないが、もつ夜中……下手をすれば夜明けにならうという時刻のはずなのに、全く眠気は襲つてこない。それどころか、脳が活発になつているような感覚さえ起きる。

『守護者』の姿は全く見えないが、気配はまだ感じた。

「その妖怪をしずめるため、多くの術者が駆けつけた。とにかく全力をあげて妖怪退治に踏み切つたのだ。しかし、もう妖怪を止める事は叶わなかつた。……まあ、そして術者の多くは今も死靈としてここにいるがな……つまり、それが『守護者』の実体だ」

そして、達也が何か言おうと口を開くと、その瞬間いきなり気配が増えた。増殖するかのように、大量の気配が……辺りを支配する。「ほらな、集まつてきおつた。皆の者、今は戦う時ではない。あの死にぞこないの少女から進藤を奪還せねばなるまー」

ざわざわと気配が少なくなつてくる。それに合わせるように、部屋が壊れた。壁がガラガラと崩れていく。

「んなつ……」

さつきの風と大差ない、まるで押さえつけられるような突風が達也に襲い掛かってきた。外の世界が……乙葉の血だらけの死体が、うつすらと見えて吐きそうになる。

そのまま風に乗せられて、達也は意識を失った。

そして、田が覚めると、そこには自分の部屋だった。

「え、あれ？」

きょろきょろと辺りを見回しても、昨日とあまり変わらない光景が広がっている。

でも、夢ではない。

由香を取り戻さなければいけない。そして、この手で海藤成実を殺さなければいけない。

達也は小さく、息をついた。

ヒューローク 空間の静寂

静かな、何もない空間。

そこに由香はいた。

「一体、どういうこと？ どうして私をここに連れてきたの？」
イライラしながら質問をぶつける。海藤成実は、くすくす笑つて由香を見る。

「遠藤先輩に、頼みがあるから」

静かな空間に、その声は大きく響く。由香の手に思わず鳥肌が立つた。

「先輩には、まだまだ、頑張つてもらわないとね。それと、『死者』の人たちにも……」

意味深な笑みを浮かべて、海藤成実は由香に囁く。

「あなたは……一体、何者？」

感情を押し殺して由香が聞くと、海藤成実は曖昧に微笑む。

夜が明ける。

しかし、世界は狂い始めていた……

「さあ。そんなの誰にもわからない」

ざわざわと音が聞こえる。周りには何もないのに。
死ねないものへの鎮魂歌。それは、音もなく響く。全ての末路を物語る。

そんな不気味な音を聞きながら、海藤成実は手を高くあげる。まだ包帯が取れていないとこ見ると、あまり軽傷ではないようだ。

「全ての死者に、誇りと尊厳を」

その手にゅあらりと由に筋が集まつてくる。

由香はそれをみて直感した。『死者』達だ。集まつてきている…

…どうして？

「この死者達は、私が、取り戻すからね……」

海藤成実は、小さく笑つた。

そして、由香の前に炎が燃え上がる。由く、そして穢やかに燃え続ける。

「どうして、そんなことを？」

歪む視界に戸惑つ由香に、海藤成実の透き通つた声が、優しく告げた。

「やみなみの命図とい、宣戦布告、かな

ハピローグ 空間の静寂（後書き）

第一部、楽しんでいただけたでしょうか？
第一部も投稿中なので、読んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9213a/>

言葉にまぎれたうやむや世界。

2010年10月8日15時29分発行